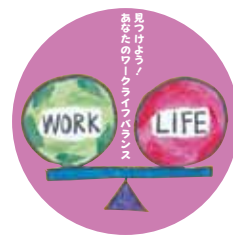


NEWS Letter



学長・学部長と女性研究者等との懇談会開催

5月10日開催の工学部における学長・学部長と女性研究者との懇談会に引き続いて、他のすべての学部（基盤教育院を含む）で懇談会が開催されました。女性研究者の声に直接耳を傾け、研究環境の改善に繋げようとするものです。

それぞれの懇談会の冒頭では、結城章夫学長から、組織の構成員の多様性（ダイバーシティ）を積極的に生かしていくこと、その

一丁目一番地が男女共同参画であることが強調されました。また、北野通世理事（男女共同参画推進室長）からは、6月に策定した「山形大学男女共同参画基本計画」に基づいて、各部局における具体的な施策（行動計画）を立案することや男女共同参画推進室との一層の連携について説明がありました。以下に、各部局において開催された懇談会の様子を紹介します。



人文学部懇談会（左が川畑智子氏）の様子

■ 人文学部 7月8日(木)

川畑智子氏（秋田大学男女共同参画推進室特任准教授）をお招きし、「学術分野における男女共同参画」と題したご講演をいただきました。

秋田大学では、平成20年にアクションプランを策定し、二本柱である女性教員増加のためのポジティブアクションとワークライフバランスのための環境整備に関して周知徹底を図ってきたということでした。懇談では、女性教員比率向上のためのポジティブアクションや夫婦研究者の働く場などが話題になりました。

「ポジティブアクションに対する抵抗感があるように思われるが、公募から採用までの透明性が図られればよいのではないかと。例えば男女の応募者状況を透明にし、ほぼ同数で結果として採用が

男性だった場合には説明をする。」という意見が出されました。また、「私の妻も研究者だが、山形大学に赴任した時に妻の仕事が見つからず単身赴任となったため、2年間、毎週末に東京に帰っていた。ようやく仕事が見つかって妻も赴任したが、今度は子どもをすぐに預かってくれる保育園がなく、民間の託児所をいろいろ探し回った。地方で夫婦がお互いに研究を続けていくためには、二人の仕事を見つけること、子どもを預かってくれる所があることが必要だ。」という男性教員からの発言がありました。さらに、「女子学生の増加に合わせ、男女共同参画を進めていく必要がある。山形大学の魅力や育児・介護支援の情報を積極的に発信し、応募数を増やしていきたい。」という話が出されました。

最後に「秋田大学の実践を勉強すると共に、懇談会の趣旨を生かすことができた内容となった」という渡邊洋一学部長の挨拶で終了しました。

■ 理学部・基盤教育院 7月9日(金)

教員採用に至るまでの経緯やこれまでの経験などが率直に語られました。

「女性は、結婚・出産の時期とポストドクで不安定な時期とが重なってしまう。安定した職に就けば産休・育休でなんとかなるが、ポストドクでは研究から脱落しやすい。1年以上離れると研究に携われない、またアプライしても業績数を基準に落とされる可能性が高い。ポストドクの段階でどうなっているのかも検討が必要だ。ただし、一大学だけで解決できることではない。大学ができることは、子育てができる環境を支援すること、女性の採用比率を考えていくことだと思う。」「以前に勤務していた大学では育児との両立が非常に大変だった。産休代替がなかなか手当てされなかったり、育休を取る教員も少ないところだった。集中講義にして育休を取らずになんとかかませているが、語学や体育、音楽などは集中講義ができない。さまざまな面で配慮のある産休・育休制度になれば、子育てへ



理学部・基盤教育院の懇談会の様子

の後押しになるのではないかと。」「大学ぐるみで男女共同参画を唱えていくと、差別は減り、良くなる部分がある。」

最後に櫻井敬久学部長から「これまで気づかない点も多くあった。女子学生の指導は男子学生と比べてとまどうことがあるが、私の意識の問題か世代の問題なのだろうと思う。女性教員を増やすためにまず環境を整備する必要がある。」という挨拶がありました。

医学部 8月2日(月)



医学部懇談会の様子

医学科・看護学科合同で「学長・学部長と女性研究者等との懇談会」が開催されました。最初に、山下英俊学部長、鈴木匡子主任教授、櫻田香教授、平賀愛美講師の4人の方々から、医学部・病院の現状や日頃考えていることが発表されました。

「女性には出産や育児があり、男性と同じように仕事をするのができない時期がある。同じ時間における仕事で評価するのではなく、どういう仕事をしたかという成果で評価する。評価観を社会全体で変えていかなければならない。それが意識改革である。」

「男性医師はほとんどの時間を仕事に費やし過重勤務になっている人が多い。そのため、さらに女性が休みを取って男性の仕事を増やすようなことは遠慮してしまう。男性のワークライフバランスが実現しないと、女性の権利も行使することは難しい。」

「ワークライフバランスは女性だけの問題ではなく、男性の問題でもある。」

「24時間保育は非常に助かっている。子どもはすぐ病気になるので病児に対応できるシステムもあってほしい。」

最後に、小林淳子看護学科長から、「多様性を組み込んで組織のアクティビティをあげつつ、一人ひとりが働きやすい環境を作って仕事を続けることができるよう、共に尽力していきたい。」という挨拶で終了しました。

地域教育文化学部 8月2日(月)

教員及び職員の立場からそれぞれの意見や経験が出されました。

「着任時『女の先生がきてびっくりした』と言われた。今日大きく変わってきたが、見えない部分は隠れている。ジェンダーの視点で見ていく必要がある。一教員として研究者として注意深く関わっていききたい。」

「夫が単身赴任のため、平日は2人の幼児を1人で世話している。子どもの急な発熱で仕事を休むのは難しく、特に教員免許更新講習や入試業務などを担当する時はプレッシャーが高くなる。でも、身近に話を聞いてくれる先輩教員がいるので頑張ることができる。企業に勤務している夫の育休についてもアドバイスを受け実現できた。」

「事務職では、女性の採用が増えてきて職場では、産休が重なるケースも起きている。仕事が滞らないような対策が必要だ。」

「一方で教員の場合は、授業等があり産休・育休を取りにくい面があり、その方策も必要だ。」

「男性の育休促進も必要。意識改革の大きな一つのやり方だと思う。」

最後に、那須稔雄学部長から「いろいろな意見を聞くことができよかった。男女共同参画についてこのように話し合う機会は初めてだが、身近な人に相談でき、支え合っていけるということがとても重要であるということがわかった。」という感想と挨拶があり終了しました。



地域教育文化学部懇談会の様子

農学部 8月9日(月)

キャンパスが離れている上に女性教員が少ない農学部では、女性あるいは男性研究者との横の繋がりを求める声が聞かれました。

「私は常に男の人たちの中で働いてきた。このような懇談会は経験がないので男性の立場からの意見も聞きたい。」

「子育てとかワークライフバランスとかをあまり考える余裕もなく生活している。小中高校生にどうすればサイエンスに興味を持って

いただけるかに関心がある。」

「女性の応募が少ない。女性教員の数を増やすことは積極的にやるべきだが、特別扱いは避けるべきだ。30代の任期付きの研究者は男女を問わず先が分からないという状況があり、そこに問題があると思う。」

「男性の共同研究の輪の中に入りにくいところがある。どうしても声をかけやすいのは同性だ。信用してもらい輪の中に入ってやっていきたい。私の課題でもある。」

「共同研究までいかなくとも、いろんな人との横のつながりが欲しい。」

最後に安田弘法学部長から「男女共同参画に関しての意識改革には乗り越える壁があると再認識させられた。農学部としても男女共同参画に対しどのような対応がベストか考えたい。それに当たっては、教職員の意見を聞きながら、組織が活性化されるような方向で検討したい。」という感想と挨拶があり終了しました。



農学部懇談会の様子

女子高校生・大学生対象 女性研究者の裾野拡大のための公開講座及び パネルディスカッション開催

9月7日(火)

国際ナノプラクティン学会主催、理学部及び男女共同参画推進室共催による公開講座及びパネルディスカッションが、女子高校生・大学生等を対象として開催されました。会場には多様なナノプラクティンの写真を掲載したパネルが並び、各国から参加した約120名の研究者による情報交換が行われました。

学会会長を含む5名のパネリストは、この分野の第一線の研究者で、この分野に進むきっかけや道のり、挫折やチャンスについて興味深いお話が語られました。高校生から「就職の内定を断って大学院

に進学したり、南極観測隊の一員になる時など、決断するときは誰に相談するのですか、家族の反対はないのですか」という質問に対して、原田尚美氏より「母には反対されたが、父はやりたいことはやりなさい、と言ってくれた。これまで、自分で決断してから周りを説得してきた」という答えがありました。

当時、南極観測船では男性200人中、女性1人でトイレや風呂も共用で順番に使用していたということでした。現在では海洋調査船の船内設備も整い、乗船者の2割は女性になってきている、という説明がありました。パネリストたちから若い人たちへのエールが送られ、和やかさと温かさのあるディスカッションとなりました。

終了後も、パネルの前で質問する高校生に対して、パネル作りに加わっていた山形大学理学部の学生たちが丁寧に対応している姿が印象的でした。



高校生の質問に答えるパネリスト
(左から)富岡(萩野)恭子氏(岡山大学) 原田尚美氏(海洋研究開発機構)
Paul Bown氏(ロンドン大学)学会会長
Denise Kulhanek氏(米国国立科学財団ポスドク)
Emanuela Mattioli氏(リオン大学)

朗報

山形大学 男性育児休業取得者第1号!!

2児のパパとなった財務部の内藤修広さんが育児休業取得男性第1号となりました。「出産したばかりの妻の負担軽減と我が子との時間共有のために決意した。」とのこと。男性の意識改革と大学のイメージUPにつながる英断を応援します。

平成22年度 山大託児サポーターの誕生

9月に行われた託児サポーター養成講座を受けて、22年度の託児サポーターが15名誕生しました。NPO「やまがた育児サークルランド」のご協力のもと、実習も経験しました。託児ルームでは幼児及び学童をお預かりしています。どうぞご利用ください。

第1回アドバイザー・ボードの開催

7月16日(金)



(左から)元村有希子氏(毎日新聞科学環境部副部長)
赤塚孝雄氏(山形県立産業技術短期大学校長)
伊藤真知子氏(東北公益文科大学教授)

外部有識者として赤塚孝雄氏、伊藤真知子氏、元村有希子氏の3名を迎えて、第1回アドバイザー・ボードを開催しました。本学の男女共同参画推進に関する資料と当日の報告及び質疑応答を基に、次のような評価と今後のアドバイスをいただきました。

●評価できる点

ワークライフバランスの実現と女性研究者支援とを結びつけている点が評価できる。大きな総合大学であるが推進体制が全学的に整備されてきて敬意を表したい。県内の大学や組織のモデルとして影響力がある。医学部24時間保育所に関しては、大学独自予算で努力している点、気概が伝わってくる。

●今後、期待する点

女性同士の横の繋がりを作るような支援の制度設計が今後の鍵である。県内でカップルで働ける策も課題だ。WLBに取り組んでいることを発信すると、地域貢献にもなる。これだけの取組をもっと全国に知られるようPRに努めてほしい。



学長及び男女共同参画推進室員

女性研究者からの The Message 【第4回】

◎女性研究者を順次紹介してまいります



木村 直子 先生

山形大学農学部食料生命環境学科 准教授



◎研究者になろうと思ったきっかけは何ですか。

母が弘前大学農学部の事務で働いていたため、幼少期は母の休日出勤で、職場である金木農場によく連れられて行きました。そこでは、牛舎にこっそりと足を運んで、唸りながら草を食べているホルスタインの顔と挙動をじっと眺めたり、草っぱらで気ままに散歩する馬にそっと近づいては逃げられたり、それらが非日常的で楽しかったのです。この金木農場での風景と津軽平野にそびえ立つ津軽富士「岩木山」の姿が、私の原風景なのだと思います。

24年前の大学入試の合格発表日に、発表会場で突然テレビ記者に「大学では、何をしたいですか?」とインタビューされ、私は吐嗟に「バイオテクノロジー」と答えました。実は当時、バイオテクノロジーのバの字もわかっていなかったと思います。大学では農学部で畜産学を専攻しましたが、学問よりも早く社会人になって外界をみたいという思いが勝り、学部卒で早々に就職したのが、たまたま食品メーカーの研究所でした。アニマルバイオテクノロジーの研究室に配属され、牛受精卵の雌雄判別試薬の商品化が主な私の仕事でした。現在は販売終了になりましたが、この試薬のプロトコールの作成や判別精度の検定、試薬名の所内公募まで、商品化の一から十までに関わりました。入社3年目、自分の手でこの商品の初出荷を終えた翌日は、緊張の糸が切れたのが、入社後初めて寝込んで会社を休んだことを覚えています。メーカーでの「ものづくり」の醍醐味を味わえたことは、とても幸運でした。

幼少期の原風景、潜在意識にあったのだろう動物の体やバイオテクノロジーへの興味、さらに偶然が重なって、私はアニマルバイオテクノロジーの道に入り込んだわけです。

転職は入社後4年目でした。新たななる商品開発へのプレッシャーが研究室にのしかかり、重苦しい毎日でした。そういう中で、科学技術の進歩とは螺旋階段を上るようなもので、基礎研究の進展と新技術の開発は螺旋の左右両端なのだと思ってきました。この螺旋階段を上り続けるためには、自分に基礎研究を推進する力がないことを実感したのです。「研究者として、やっていけるのか?」、数年間自問した挙句、退職し、大学院博士課程に進学しました。すでに30才でした。もう後がない必死の10数年を経て現在に至るわけですが、色々あっても喉元過ぎれば何とやらです。これからも「研究者として、……?」の自問は続きますが、29才の時の決断は正しかったと思います。

◎現在、どんな研究をしているのですか。

「卵子の博士」になって、哺乳類雌の生殖寿命を克服する技術を開拓することが目標です。現在は、卵子の酸化ストレスと老化現象の分子機構の解明に焦点し、医学部と工学部の先生方に御指南を頂きながら進めています。

Hello! University 他大学の取り組み紹介

女性研究者支援モデル育成事業に取り組み、実績のあった他大学の事例を紹介するコーナーです

東北大学 女性研究者支援モデル育成事業の継続と改革加速事業へのジャンプアップ

3年間の「女性研究者支援モデル育成」事業の成果を基盤にして、さらに次の「システム改革加速」事業に取り組んでいます。モデル育成事業では、支援要員制度・ベビーシッター利用料補助制度・女性研究者の職場環境の改善・次代を担う女性科学者の養成等を整備し、事業終了後は大学独自の予算で継続しています。

平成21年度からの改革加速事業では、(1)女性教員数の増加(5年間で30名の新規採用)、(2)女性研究者をリーダーとする研究プロジェクトや研究業績数の増加、(3)異分野融合学問領域の研究の創出、(4)全学の男女共同参画意識の醸成により、希望の研究スタイルと実際のスタイルとの不一致の解消、(5)世代や分野を超えた交流の深化、を目指しています。



Information ①

「女性研究者の裾野拡大のためのセミナー」を開催します

女子高校生・大学生の参加をお待ちしています。詳細は後日お知らせします。

- 農学部 11月6日(土) 「大学院生に聞いてみよう!大学での研究生活ってど~んな感じ?—女性研究者裾野拡大セミナー in 農学部 part3」
- 理学部 11月19日(金) 「次世代を担う女性研究者による未来予想図 ~元気な女子が世界を変える~」
- 人文学部 12月予定 「女性研究者裾野拡大のためのセミナー」
- 工学部 1月予定 「目指せ!理系マドモワゼル!~理系女子力UPセミナー~」

Information ②

「男女共同参画国際シンポジウム」の開催

郷通子氏(前お茶の水女子大学長)、キャロライン・ケイン氏(カリフォルニア大学教授)をお招きし、学術分野における女性のエンパワーメントに向けてご講演をいただきます。

「女性研究者の育成と支援」
●日時/11月12日(金)
●場所/山形大学小白川キャンパス 基盤教育1号館121教室

各キャンパスの女性研究者の皆様、巡回相談に伺います。女性研究者(教員・博士課程院生)を対象とした第2回巡回相談です。日頃お感じのことやご意見などをお伺いします。日時の調整等ご協力をよろしくお願いいたします。



山形大学男女共同参画推進室

〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12
TEL 023-628-4937、4938、4939
E-mail danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp
http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/

編集後記/酷暑の夏も去って秋を迎えました。各学部企画のセミナーが予定されています。実り多いものとなることを祈っています。2010年10月